

## 第 41 回 東海外来小児科研究会 一般演題

発表：7分 質疑：7分

座長：和田映子

9:30～10:29

演題 1：思春期におけるスキンケアと湿疹コントロールをどうすべきか

=当院の実際を含めて=

徳田ファミリークリニック 小児科・アレルギー科  
国立病院機構三重病院臨床研究部 徳田玲子

【目的】性による体の変化などにより思春期は、乳幼児期とは湿疹が目立つ場所や皮膚の様相が異なってくる。加えて日常生活でのストレスも多く、アトピー性皮膚炎の重症割合が多いとされている。思春期の皮膚トラブルに関して実例を提示しスキンケアと湿疹コントロールをどうするのか検証したい。【結果・考察】2020年10月から2022年9月まで2年間の外用薬処方から当院アレルギー外来では0～80歳代と幅広い年齢層を診療しており、5～9歳の次に10歳代の思春期が多い。尋常性ざ瘡以外に、皮膚トラブルを観察すると日常のスポーツ、コロナ禍による生活様式の変化や最近の美容ブームなど思春期ならではの影響を多く認める。皮膚トラブルの悪化因子を見つけることによって、外用薬などのスキンケア以外に再び悪化することを予防するためのアドバイスが出来ることは思春期ではとても重要なことと考える。

演題 2：それはロゴマークからはじまった ―オリジナル絵本による外来診療の工夫―

すずこどもクリニック 鈴木聖子

外来診療時間には限りがある。アレルギー疾患など慢性疾患の治療には病気の理解を深めこども自身が治療に前向きであることが症状改善に不可欠である。2016年開業から毎年1から2冊を目標に『アレルギーとこどものえほん』というオリジナル絵本を作成し、来院した児の症状に該当する本を診察時に渡している。食物負荷試験からはじまり漢方について、食育の授業の内容をまとめたもの、アンガーマネージメントなどテーマはいろいろあり毎回わくわくする内容を盛り込み繰り返し読むことで楽しく治療に参加できるよう支援してきた。絵本と一緒に読むことにより親子で病気について話し、治療に取り組む姿勢に変化があると感じている。2022年12月から2023年3月に行ったアンケート内容をもとに現在10作目を制作している。アンケートの回収が本好きのこどもに偏っているため参考程度ではあるが外来診療における絵本の効果をまとめたため報告する。

### 演題 3：SARS-CoV2 系統樹解析とアンケート調査

杉浦こどもクリニック 杉浦時雄

2022 年 2 月、クリニックのホームページ（HP）に SARS-CoV2 系統樹解析の図を掲載した。時期としては、オミクロン株による第 6 波にあたる。オミクロン株はデルタ株からの子孫株ではなく、全く別の株であることを解説した。また、デルタ株より感染力は強いが、重症化も致死率も低いことを説明した。その後、クリニックの公式 LINE でアンケート調査を行った。110 名の回答結果は以下の通りである。HP のデータ：分かりやすい 82%、分かりにくい 18%。データを見て：安心 38%、どちらともいえない 57%、不安 5%。コロナの情報：必要 97%、不要 3%。

自由記載の意見を一部紹介する。「連日の報道で、やはり不安が消える事がなく、不安を煽るような心無い言葉を耳にする事もあります。」「小児科医の先生達が、基礎疾患などなくリスクが少ない子供達の望ましい生活環境をもっと強く世間や行政に提示してほしいです。」

### 演題 4：タイムカードをやめて勤怠管理ソフトにしませんか

矢嶋小児科小児循環器クリニック 矢嶋茂裕

出退勤管理にタイムカードを使っている診療所は多い。勤怠管理ソフトを導入することで、時間外やパート労働者の勤務時間の計算が容易になるが、単なる出退勤の管理だけであれば無料で使えるソフトも多い。有償にすれば、有休の管理、シフト作成から給与計算まで可能なソフトもある。すべての機能を使っても月額ひとりあたり 200～300 円程度で済むソフトもある。給与計算を外部に委託している場合にはかなりのコストダウンが期待できる。

勤怠管理ソフトは多数あるため、どれを使うのが良いか迷うことも多い。試用期間は長くて 2 ヶ月程度なので、診療の傍らで使いこなすことは難しいかもしれない。今回はいくつか試用した上で本格導入した経緯と使用感を紹介し、導入に興味を持っていただけることを期待している。

【休憩】

座長：村木敬行

10:45~11:29

演題5：食思不振、低体重を機に見つかった亜鉛欠乏症の3例

医療法人道雄会 和田クリニック 和田映子

亜鉛欠乏による皮膚炎、脱毛などはよく知られているが、昨今、体重増加不良、下痢、低身長、思春期が来ないなどの症状も注目されている。今回、食思不振、低体重を機に低亜鉛血症が見つかった3例を経験した。

症例1：10ヶ月女児。生後間もなくから母乳の飲みが悪く、嘔吐しやすく、両親は育児に困惑していた。離乳食が始まってほとんど食べられず体重が増えないため、8ヶ月の時に血液検査を実施したところ低亜鉛血症が見つかった。

症例2：3歳男児。3歳健診時に低身長、低体重を指摘され精査目的で当院受診し、血液検査で低亜鉛血症が見つかった。

症例3：6歳女児。春頃から食事をすると気分が悪くなるが増え、時に嘔吐もあり、体重減少が始まった。当院から基幹病院へ紹介するも診断がつかず、低身長もあったため、その後内分泌専門クリニックへ紹介したが経過観察となっていた。その後脱毛も見られるようになったため、亜鉛を測定したところ低亜鉛血症が見つかった。

3例とも経口的に亜鉛を投与し、現在は経過を見ている。食思不振、低体重などの児を見た時は血清鉄、フェリチンに加えて亜鉛も測定する必要があると思われた。

演題6：小児科外来における小児の衛生行動と保護者の認識

—1歳から就学前までの小児とその保護者に焦点をあてて—

- 1) 名古屋市立大学大学院看護学研究科 吉川寛美<sup>1)</sup>、矢野久子<sup>1)</sup>
- 2) 三重大学大学院医学系研究科看護学専攻 村端真由美<sup>2)</sup>

【目的】小児科外来受診時の小児の衛生行動の実態と保護者の感染予防への認識を明らかにする。

【方法】2022年12月、東海3県在住で、1年以内に未就学児の小児科外来受診に付き添った保護者を対象にWeb調査を行った。

【結果】回答者数は328名。小児の行動で多かったものは、「受診の目的に合わせて適切な時間に受診をした」285名(97.6%)、「待合室で症状のある患者と距離を空けた」164名(85.9%)等であった。「病院から出る時に手指衛生をした」は147名(48.7%)であった。保護者の認識では、受診時の感染予防について277名(84.5%)が「重要」「やや重要」と回答した。小児の行動による感染の危険性については、多くの行動で6割以上の保護者が「ある」「ややある」と回答した。

【考察・結論】保護者は小児外来受診時の感染予防の重要性を認識していたが、小児の行動では改善の余地のあるものもあった。

## 演題7：令和と平成の育児の悩みの変遷を考察する

～1歳児パパママ教室相談会を通して～

蜂谷医院小児科 蜂谷 明子

2001年に厚労省が母子保健の新たな取り組みとして、具体的な数値目標を挙げて達成する事業を提唱した（健やか親子21）

それを受けて恵那市は、妊娠中の「たまごパパママ教室」と1歳を迎えた両親への「日曜ひよこパパママ教室」という二つの事業を開始した。（現在は母子保健法の改正により”母子健康包括支援センター“が設置され、行政の部署は異動しているが、事業は継続している）

前者（たまご）は産科医と助産師、後者（ひよこ）は演者と乳幼児学級の保育士とで担当した。

「日曜ひよこパパママ教室」まずは1歳児の育児に関する講演、保育士による遊びの実習、そして個別育児相談会の3部で校正されている。

個別育児相談会を20年以上続けて来たが、この数年、保護者の相談内容が変遷して来た。

今回、その相談内容について統計を立てて、変遷の事由を演者なりに考察したい。

そして、御聴講の皆様の御意見を拝聴し、今後の育児相談に生かしていきたいと考える。